

悩みのつぼ

義理の親を看取る理由は？



相談者

主婦 40代



作者

作家 車谷長吉

私の父は75歳で狂死しました。66歳で肺結核になり、結核菌が脳に上ったのです。便所で用を足すのも理解できなくなつたので、毎日、畳の上で大小便

は他の生き物を殺し、それを食うて生きています。私は30代の8年間、料理人をしていたので、多くの魚・エビ・カニなどを殺し、給料をいただいていた。直接殺さないでも、食べている人には深い原罪があります。この原罪のない人は、この世にはいません。

頭では理解していても、心では納得できないことが、人には多くあります。どうすれば心で納得できるか。その方法は、私には分かりません。



40代の主婦です。車谷長吉さんは毎回宗教的にも言える観点から回答されているので、今回の私の相談も、そのような視点から、お答えを頂きたいのです。

人はどうして、年を取った親の面倒をみなくてはいけないのでしょうか。とくに義理の親の場合です。

自分の両親が弱い立場になつてしまったら助けてあげたい、寄り添ってあげたいのは当然ですが、私は現在、夫の両親と同居しています。どうして苦しい思いをしながら義理の父母と同居を続け、いづれ面倒を見ることをしなければいけないのか、その理由が見つかりません。

同居を始めて、義父母の強い干渉と、多忙な夫とのすれ違い、生活の孤独感から、1年後には私は心の病氣になりました。そこから、色々な病氣を併発し9年がたちました。気持ちの支えにしていた仕事も病氣のため辞めざるを得なくなりました。自分の生きる意味さえわからなくなりました。

現在は治療をしながら、義父母から自分の存在を消すように毎日ひっそり生活しています。同居しているわけですから、現実問題として、ゆくゆくは義父母の看取りまで私がするのです。そのことは頭ではわかっているつもりですが、そうしなければならぬ理由、自分を納得させる理由が欲しいのです。

逃げ出す以外に道はありませんが……

をしていました。10歳下の母はいま85歳。田んぼ仕事を生き甲斐にしています。都会生活が嫌いなので、東京を厭がっている。母の面倒を見てるのは、田舎の弟です。時々、新聞・テレビに私が出るのを楽しみにしています。が、私が作家という「ならざる者」になつたので、私は出入り禁止です。

義父母の看取りをするのが厭いななら、逃げ出す以外に道は、私に分かつたのは、作家

ありません。逃げ出せば、ホッとする、と同時に、いまよりさらに苦しい思いをしなければならぬでしょう。人間としてこの世に生まれてきたことには、一切の救いはありません。救いを求めるさもしい心はありますが、だから人は、四国お遍路へ行ったりするのです。弘法大師の教えに従って。私も嫁はんと歩いて行きました。行つたけれども、私に分かつたのは、作家



である自分には救いはない、ということでした。作家は人間悪をえぐり出す人です。でも、お遍路に行けば、救いを感じる人もいると思われれます。そういう人に数人、出会いました。

私が現実には四国お遍路に行つて、一番救いを感じたのは、お遍路さんが通る山道を、小さなスコップ・手鉤などで補修している初老の人に出会ったことです。毎日、一人で黙々と遍路の手入れをしているようでした。話しかけようとしたが、手を休めようとしなかつたので、頭を下げて通り過ぎ、仏さまに出会ったような気がしたので、あとで木の陰に隠れて土下座をして拝みました。それを思い出すと、今でも涙がにじみます。

あなたさまのお悩みを讀んでみると、あなたさまを含めてこの一家の人には、救いはないと思えます。それを覚悟なさるのがよいと思われれます。

題字・イラスト きたむらさとし